

令和7年10月10日

第87回全国都市問題会議報告

報告者：山崎貴裕

開催日：令和7年10月9日（木）～10日（金）

会場：栃木県宇都宮市 ライトキューブ宇都宮（宇都宮駅東口交流拠点施設）

参加者：佐藤弘治、仲間正司、森田哲哉、山崎貴裕、小林貢、小澤芳輝、
武藤政義、清水義朋

◎第一日目 【10月9日（木）】

第87回全国都市問題会議テーマ

『成熟社会の都市のかたち～コンパクトで持続可能なまちづくり』

①基調講演

【人口減少・成熟社会のデザイン】

京都大学名誉教授教授 広井良典氏

日本の人口は、2100年にはピーク時であった2008年の約半分にあたる6300万人に減少すると言われている。この状況は、ピンチではあるが新しい発想でチャレンジするチャンスでもある。

・人口減少社会の基本的視点でみると、人口増加の時代は、すべて東京に向いていた（太田裕美の木綿のハンカチーフの歌詞にあるように）が、今は真逆の時代で、地元の大学への進学率は約44.8%（2024年4月入学者）と過去最高となるなど若い世代のローカル志向が高まっている。そうした方向を支援する政策が必要である。

・AI を活用した、持続可能な日本の未来（8～10年後）に向けた財政構造や生活保護、社会的補償などの政策提案が必要となる。また、日本の未来にとって都市集中型か地方分散型かを選択して政策を実行する必要がある。自由度の高い形で多様な働き方や生き方をデザインし、自らの創造性を伸ばしていく時代でそれが経済発展、ウェルビーイングにとっても良いことだ。

・分散型社会＝持続可能な社会である。福祉政策と都市政策をつなぐことが大切。ドイツなどまちの中心部に自動車排除の空間があるが、これは経時的にも福祉の面、環境の面

からもプラスにはたらいっている。そこには高齢者もゆっくりと楽しめ、座れる空間がある。歩いて楽しめるまちづくり(ウォーカブルなまちづくり)、「コミュニティ空間」を意識した、ウェルビーイングな都市・地域づくり、これこそコンパクトシティの本質である。

・日本の地方都市の現状は、空洞化(シャッター通り)している。今の高齢化社会をチャンスと捉え、コミュニティ空間という視点を重視した歩行者中心のまちをつくるべきだ。例を挙げると、香川県の丸亀商店街や姫路駅前トランジットモールがそれだ。一極集中から「小極集中」をへて「多極集中」へさまざまな居場所、たまり場、サードプレイス、コミュニティの拠点が求められている。

・これからはローカリゼーションと生命の時代で。産業構造の変化からみてもローカルは重要で、ローカルを出発点として、ナショナル、グローバルへとつなげていく時代となっていく。そして情報から生命へ、デジタルの「先」の「生命」が重要なコンセプトになっていく。

②主報告

【人口減少社会に対応する都市の構造改革

～100年先も発展できる「ネットワーク型コンパクトシティ」の形成～】

栃木県宇都宮市長 佐藤栄一氏

宇都宮市は、かつては中心市街地を核に人口や都市機能がコンパクトに集中していたが、人口増加に伴い郊外に拡散していった。この市街地の外延化により、都市機能や居住の密度低下が生じ、人口減少社会においては、中心市街地の活力の低下や空き家、空き地の増加、公共交通空白地域の増加、地域コミュニティの衰退といった問題が懸念されている。これからの人口規模・構造や都市活動に見合った都市の姿である「ネットワーク型コンパクトシティ」(NCCという)を長期的なまちづくりの方向性として全国に先駆けて位置付けている。NCCを具体的にいうと、中心部の都市拠点と周辺の地域拠点を階層性のある交通網で結ぶことであり、「ライトライン」が整備された。ライトラインは、次世代型路面電車であり、輸送力や定時制・速達性に優れ、その車両は、騒音や振動が少なく快適な乗り心地を追求し、車両床部と停留所の段差も無く、デザインも個性的で洗練されたものでまちのシンボルとなっている。家庭ごみの焼却によるバイオマス発電などの地域由来の再生可能エネルギーのみで走行する「ゼロカーボントransポート」であり脱炭素、SDGSの考えがあらわれたものとなっている。このライトライン整備の効果は沿線人口の増加、沿線工業団地への投資増、自動車交通量の減少といった効果がもたらされている。さらに、沿線住民の食事・娯楽などの交流機会の増加や外出率の増加などライフスタイルの変化に影響を与え

住民のウェルビーイング向上への関連性も伺える。

2030年を見据えたまちづくりとして、NCCを土台にした「スーパースマートシティ」を目標にしている。これは「地域共生社会」、「地域経済循環社会」、「脱炭素社会」の3つの社会が人口減少社会においても持続的に発展するまちのことであるが、女性や若者をはじめ、性別や年齢にかかわらず、誰もが豊かに便利に安心して暮らすことができ、100年先も発展し続けられるまちの実現を目指していく。

③一般報告

【「縮充」発想による公共施設マネジメント】

東洋大学国際PPP研究所シニアリサーチパートナー 南 学氏

「縮充」発想による「公共施設マネジメント」が必要だ。「縮充」とは、「拡充」の時代から「縮小」の時代への変化をネガティブとして見るのではなく、縮小しても機能の充実につながれば、むしろポジティブな将来像も描けるのではないかと考え、生み出した造語で、小さくても充実するという意味である。財源がない中、公共施設の老朽化が進んでいる現状では、縮充するしかない。「公共施設マネジメント」としては、学校や庁舎などの包括的点検・修繕委託を総合ビルメンテナンス会社に委託することだ。また、公共施設の小学校への集約が必要だ。それにより、多くの公共施設は稼働率が低いいため、利用面積を縮小して固定費削減が図られる。

公共施設マネジメントは喫緊の課題であるが、その解決への手法は、地域住民の利活用を基本に、地方公共団体、民間、市民のさまざまな協働（連携）と負担とを合理的に調整し配分する「縮充」しかないことが明らかになりつつある。そして、この手法は成熟社会における都市のあり方検討にも十分に応用可能であることを強調したい。

【都市縮小時代の持続可能なまちづくり

～人がつどい未来に躍動する 世界都市・高松～】

香川県高松市長 大西秀人氏

全国の地方都市は、今だかつてない変革の時代を迎えている。特に中心市街地の空洞化は深刻で、地域に根ざした持続的な都市経営が必要であると考えます。そして、本市の象徴的な取組みが市中心部の丸亀町商店街の再生である。衰退の危機に瀕していたこのエリアを住民・商店主・行政が一体となり、構想から約30年以上をかけて官民連携による持

持続可能なまちづくりを実現してきた。成果としては「都市の回避性とにぎわいの創出」、「歩いて暮らせる都市構造」、「市民主体の合意形成とルールづくりの成功」が挙げられる。

都市縮小時代においてこの丸亀商店街の再生を通じて 1 つの希望のかたちを示すことができたと考える。人口減少や経済の成熟化は、決して衰退を意味するものではなく、むしろ「質の高い暮らし」や「人にやさしい都市」を再構築するための転換点とすることができる。その鍵となるものは、「まち」はそこに暮らす人々自身によって再生されるべきものであるということだ。そして、行政には信頼される伴走車となることが求められる。

【次世代交通とコンパクトで持続可能なまちづくり】

早稲田大学理工学術院教授 森本章倫氏

都市を構成する2大要素は土地利用と交通である。徒歩の時代は歩いて暮らせる範囲で市街地が形成され、鉄道の時代になると街の中心は鉄道の駅周辺に吸い寄せられた。そしてマイカーの時代が到来すると市街地は郊外部に広がり、都市の人口密度は低下し続けた。主たる交通機関の台頭が都市の形成を大きく変化させてきた。

この先自動車に代わる交通機関は確定できないが、ICT で結ばれ、シームレスに利用できる人中心の交通システムと予測できる。そのためには、コンパクトシティを支える交通戦略を立案すべきだ。集約エリアには徒歩を中心にウォークブルなまちづくりを目指し、都市内の移動には定時制と利便性を備えた次世代公共交通を導入すること、郊外の非集約エリアには自転車やパーソナルモビリティを活用しつつ、ライドシェアできる自動運転車を導入することだ。

都市部を魅力的な空間へと再生し、集約エリアを新しい居住地として選択する人が増えていけばコンパクト化は進行する。車離れが進む若者と車を手放した高齢者が新しい住みかとして集約エリアを選ぶかがコンパクトシティ成否の鍵を握っている。

◎第二日目 【令和7年10月10日(金)】

①パネルディスカッション

テーマ:【防災とコミュニティ】

コーディネーター: 埼玉大学大学院人文社会科学研究所教授 内田奈芳美氏

パネリスト:株式会社みちのりHD代表取締役 グループCEO

(兼)関東自動車株式会社代表取締役社長 吉田 元氏

まちなか広場研究所主宰 山下裕子氏

北海道室蘭市長 青山 剛氏(代理出席:企画財政部長 高橋知規氏)

鳥取県米子市長 伊木隆司氏

●内田奈芳美氏

20世紀の都市を最も大きく変化させたとされるのは自動車の普及であるが、成熟社会の中では、まちなかを歩くことで偶然の出来事と出会い、「市民は自らの街や共に生きる人びとを知り、真の意味で都市に住まうようになる」ことにこそ都市が存在する意味があるのではないか。

広大な国土を持ち、自家用車を所有することが自由の象徴とされるようなアメリカにおいても、歩行者の快適性を重視する戦略がまちなかで進められている。

ストリート上で留まったり回遊して楽しむようなパブリック・ライフが創出することは、歩いて楽しめるコンパクトな範囲に人の流れと都市構造を誘導することにつながる。

成熟した社会の中では、自らの選択として「歩く」ことを選んでもらうための楽しさづくりは、まちの中心部の魅力向上やコンパクトシティにも繋がる概念だといえる。

●吉田 元氏

日本では人口減少・高齢化社会に伴い、コンパクト・プラス・ネットワークによるまちづくりが国の重点施策となっている。これは、拠点を面的に再編し、公共交通で結ぶことで利便性と持続可能性の両立を目指す考えで、これには交通事業者と行政の協力が不可欠だ。さらに、持続可能なまちづくりには交通分野での脱炭素化も重要で、自家用車依存からの転換が求められている。

関東自動車では、地域の交通ネットワークの整備に取り組んできた。地域連携 IC カードの配布や EV バスの導入、AI オンデマンドバスの導入などだが、今後も地域の交通課題に柔軟かつ先進的に対応し、持続可能な社会の構築に貢献していきたい。

●山下裕子氏

今日本では、余暇が増えている。一方、2040年には3人に1人が高齢者となり、約4割が単身世帯となる「個」の時代と言われている。このままでは、「個」が「孤」になってしまわないだろうか。世界保健機関(WHO)は令和5年に、社会的孤立を「差し迫った健康上の脅

威」と位置付けた。

パブリックライフを提唱するヤン・ゲール氏が屋外活動を必要活動・任意活動・社会活動の3つに分類した。そのうち社会活動を他者を眺めたりあいさつや会話といった他者の存在を前提とした活動と定義しており、「(他者を)眺める」行為は我々が社会の一員であることを思い出す一助になると感じ、その楽しさを伝播したい。

●青山 剛氏(代理出席:企画財政部長 高橋知規氏)

他の多くの地方都市と同様に、室蘭市も人口減少と高齢化、インフラの老朽化、中心市街地の空洞化など多くの課題を抱えている。

そうした中で、室蘭市は「コンパクトなまちづくり」を重要な都市政策の柱とし、持続可能な都市経営を目指している。まちをコンパクトにしていくうえで避けて通れないのが施設の廃止や統廃合等で、室蘭市は全国に先駆けて人口減少が進んだこともあり、小中学校の統廃合にいち早く着手した。2003年最初の小学校の統廃合から20年かけて小中学校の数を半減させてきた。

コンパクトなまちづくりは、単に市街地を縮小するだけではなく、持続可能な都市経営を視野に入れた「選択と集中」である。全国の地方都市が将来的に直面する課題に先行するかたちで取り組んでいる室蘭市が「課題先進地」から「課題解決先進地」となることで全国の自治体の発展につながり、国民の幸せにつながるよう、成長を続けていきたい。

●伊木隆司

米子市は、公共交通の利便性向上と徒歩でも移動できる街を作り直すことをまちづくりのテーマとした。そこで JR 米子駅の改修によるアクセス性の向上策や、時期を同じくして始まった国土交通省のまちなかウォーカブル推進事業によるハード整備と、商店街の有志などによるイベント開催などのソフト事業を組み合わせ、中心市街地を「歩いて楽しいエリア」と感じてもらえるよう、取り組んでいる。

しかし、車での移動が定着している米子市において、公共交通と徒歩による移動を可能にしようとする取り組みは地域住民の理解が十分とは言えない。そこを変えていく取り組みが実を結ぶには時間がかかることは承知しているが、粘り強く施策を進めていくことで、持続可能なまちを後世に残すべく取り組みを進めていく。

◎所感

今、大都市を除く地方都市においては、いわゆる都市のスポンジ化現象が起きている。都市空間の外延的な拡大と低密度化だ。それは、医療・福祉、商業サービス等の縮小・撤

退や公共施設、水道、交通インフラといった行政・公共サービスの非効率化を引き起こしている。人口増加が望めないなかで都市空間を適切な大きさに再編する必要があることは、今回講演された方々、またパネルディスカッションにおけるパネリストが認識していることで地方都市が持続可能として存続するには必要不可欠であると思う。

日本各地でウォーカブルなまちづくりを求める動きがあるとの報告もあったが、行政面積の小さい福生市でも参考になる取組みであると強く感じた。また、開催地宇都宮市では「ネットワーク型コンパクトシティ(NCC)」を長期的なまちづくりの方向性として全国に先駆けて位置付けている。この NCC を支えるための公共交通ネットワークの構築が進められている。具体的には、従来からある南北方向の鉄道に加え、東西の基幹公共交通となる次世代型路面電車(ライトライン)の整備が進められていることで、各方面から注目されている。

福生市においてこれからのまちづくりを進めて行くためには、公共施設の老朽化や学校の統合など避けて通れない課題も多いが、今回の会議の内容からは多くのヒントが得られた良い視察研修となった。



上:ライトキューブ宇都宮にて
左:宇都宮市内を走行中のライトライン